

神田日勝記念館 平成6年3月31日



記念館だより

創刊号

発行

神田日勝記念館

河東郡鹿追町東町3丁目2
TEL (01566) 6-1555



発刊のことは

鹿追町長 岡野 友行



神田日勝記念館が開館して十ヶ月、当初の予想をはるかに超える方々の来館と、展示内容の高い評価の中で、まずは順風のスタートを切る事ができました。神田日勝は、この記念館を通して、鹿追町の文化のシンボルとして、永い生命を地域の人々の心に刻み続けていくことと思えます。また新しい町の魅力がひとつ加わったことで、通過する町から訪れる町へとこの変化も起きています。近隣の美術館と連動した十勝美術館ロードという造語が生み出され、広域的な芸術鑑賞の輪が発生し、文化による地域活性化も具現化してきました。

ただ記念館活動はまだ緒にすぎたばかりです。展示内容の工夫のみならず、日勝研究の深化、作品資料の収集保存、企画展の開催など、多くの課題が待っています。北国の特色のある美術施設として、着実に発展していくことを期しています。

記念館を出発点として

神田日勝記念館館長 米山将治



画家・神田日勝（一九三七～一九七〇）が天界に去ってから、やがて四半世紀に近くなり、これまで、その画業は多くの美術評論・研究の方々の強い関心と学識によるご紹介を得て、現在では、日本のリアリズムの系譜のなかに独自の個性を示すものとして、また戦後期“新具象”の代表的ひとりとして認知されております。

昨年六月十七日にこの記念館が町立として開館の運びとなります。までには、鹿追町民の皆様の熱い協賛と建設期成会を中心とする活動があり、岡野友行町長をはじめ町議会の英断がありました。更には、この地に「神田日勝記念館」を設けることに同意され、展示充実には快くご協力をいただいた神田ミサ子夫人と、関係各位のお力添

えのたまものでもあります。

さいわいにして、オープン以降の十ヶ月間に約六万五千人の観覧者を迎え盛況かつ好反響の出発となりましたことは、神田日勝の画業を顕彰し未来へ語りつぐためにも、あるいは芸術と地域との新しい活性的な関わりを發展させていくためにも、良きいとぐちであったと感じられます。微力ながら開設準備室長に引き続き当館の基礎づくりを務めてきた私にとって、それは快心でした。

今後の課題として、美術の本質の在りかをどう見分けていくかこそ大切だと思いますが、清雅にベストを尽くしたいと願っております。また、一九七五年より長く神田日勝遺作後見人を務めました私も、素懐成就にてこの六月で名儀を解消し、以降は記念館と遺族との協議に引き続きます。画家・神田日勝についての全作業の輪郭は、一記念館一地域のものではなく、広汎な連環によって日本美術史を指呼するものであったことを、改めて銘記したいとおもいます。

日勝記念館 1年の歩み

6月17日オープンした神田日勝記念館は、翌18日の一般公開以来、7月17日に観覧者1万人を達成、8月28日に3万人、10月11日に5万人達成し、平成5年度末で66,791人にのびりました。



▲H 5. 6. 17
町民待望のオープン



◀H 5. 7. 17
1万人達成



▲H 5. 8. 28
3万人達成



◀H 5. 8. 10
2万人達成



◀H 5. 10. 11
5万人達成

平成5年度入館者総数 66,791人

美術館への誘い

美術館講座はじまる

十二月十日は初代の函館美術館長・安達整氏を講師に、また今年二月二十三日には道立帯広美術館学芸課長・寺嶋弘道氏を講師に迎え、美術館講座が開催されました。安達氏は函館美術館の運営経験をもとに美術館のあり方を展望し、友の会の将来の活動について提言されました。また寺嶋氏は美術館の基礎知識を判りやすく、比喻をこめながら解説し、参加者に美術館活動への正しい理解を呼びかけました。



神田日勝記念館の開館を記念して、北海道立近代美術館所蔵作品による移動美術館「美へのいざない」が、十一月十三日から十七日まで鹿追町民ホールで開催されました。北海道を代表する日本画・油彩・版画・彫塑四十五点が展示され、会期中に一、五〇〇人の観覧者が訪れました。巡回作品には神田日勝油彩「人」も含まれ、本道美術史の流れを身近に知るまたとない貴重な機会として好評でした。

「美へのいざない」

移動美術館 93



画家・神田日勝を偲んで

第一回 「馬耕忌」

八月二十九日、鹿追町民ホールを会場に、神田日勝の生涯と画業を偲ぶ第一回馬耕忌が開催されました。命名者は信濃デッサン館主・窪島誠一郎氏、馬を描き続けた日勝のイメージに基づくものです。斉藤季夫氏の司会によるトークショーをメインとして、故人への献花・詩朗読とギター演奏、そして記念館裏庭での小宴などが行われ、多くのファンの参加の中、盛会のうち日程を終了しました。



「北・光・大地」

高橋幸男展 93

八月十三日から十七日までの期間、町民ホールを会場に鹿追在住の画家高橋幸男氏の個展「北・光・大地」が開催されました。記念館友の会の「地元作家シリーズ」の一環として企画されたもので、ホワイトホールに一三七点の作品が並び、豊かな感性で描く農村風景の世界を現出しました。会期中は五、〇〇〇人にのぼる観覧者が訪れ旺盛な制作力をみせる氏の世界に魅せられていました。



1994

2 / 22 (火) ~ 3 / 13 (日)

神田日勝と1960年代の美術

北の同時代者たち

第1回 神田日勝記念館企画展



特別展示 2F

- | | | |
|--------|----|--------------|
| 米坂ヒデノリ | 彫刻 | 「火山灰地」 |
| 伏木田光夫 | 油彩 | 「死」「家族の死」 |
| 徳丸 滋 | 油彩 | 「女」 |
| 川瀬敏夫 | 油彩 | 「人たち」 |
| 岡沼秀雄 | 油彩 | 「北辺の夜 (赤い馬)」 |
| 渡辺禎祥 | 油彩 | 「箱シリーズ・B」 |
| 富谷道信 | 彫刻 | 「アデラの結合」 |
| 寺島春雄 | 油彩 | 「工事現場」「育畜場」 |

常設 1F

- | | | |
|------|----|--------------|
| 神田日勝 | 油彩 | 「板場の風景」など20点 |
|------|----|--------------|



神田日勝記念館の第一回企画展である「神田日勝と一九六〇年代の美術―北の同時代者たち」が、記念館第Ⅱ展示室を会場に二月二十二日から三月十三日まで開催されました。常設の第Ⅰ展示室と併せて、日勝と同時代に生き制作活動を展開した作家たちの秀作を眺めなおすこの企画は、往年の時代精神のありかを再現するものとして好評でした。出品者は現在も北海道を代表する作家として活躍されている方がた、中には物故された作家もありますが、いずれも生前の日勝と展覧会での出会いを持った人たちで、その心の絆が今回の企画を実現させてくれました。

開催初日のセレモニーには、栗山町からの米坂ヒデノリ氏、帯広から富谷道信夫人のサキ子さんも列席されました。会期中にはそのほか出品作家や美術ファンも多く訪れ、戦後の北海道美術の形成に大きな位置を占める一九六〇年代を改めて振り返り、その力強い造形性に感銘をあらたにしています。いずれまた視点を変えて次回展を試みたいものです。